

ふるさと

みのおのおいたち

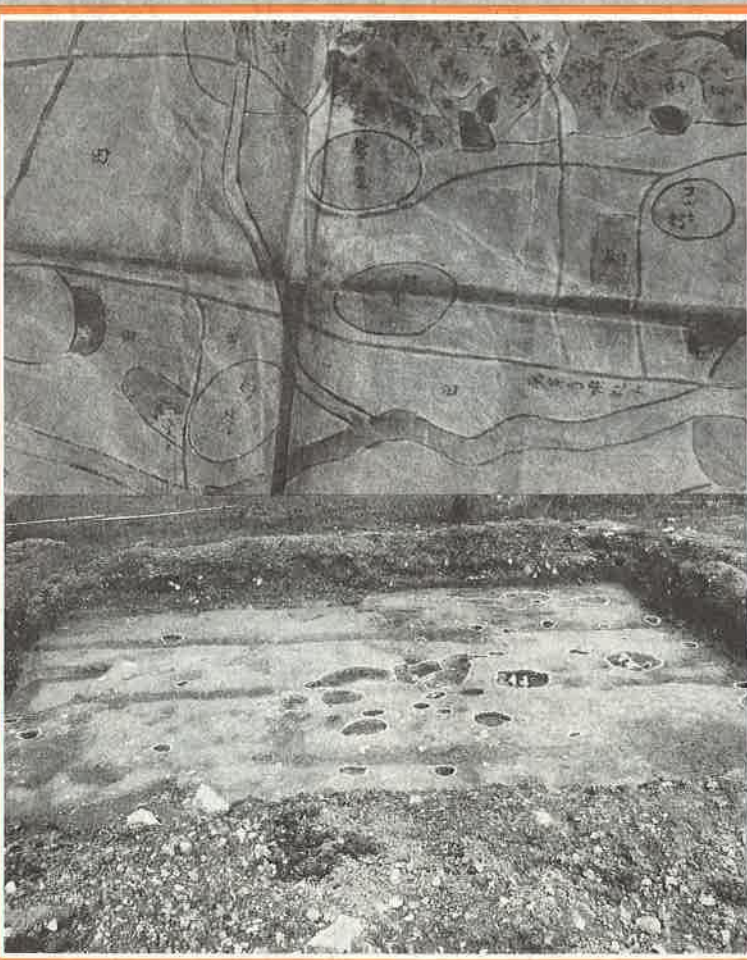
その22

期の粟生村が負担した国衙(国司の統治下にある土地)へ支払う年貢は「所当米八石九斗二合白米五斗」の他に「炭三百四十二

い時代に丹波地方からやってきた人たちがこの地に炭がまをつくり、長期間にわたって炭を生産していたことから命名された

が長い間住んでいたことに由来する地名で、これもまた豊川地区の歴史の一コマを語ってくれます。

豊川地区(四)



(上) 粟生村絵図(釜屋周辺)

(下) 大日遺跡

こうして見ると、以上の地名と遺跡は本来一体のものであったと言えるでしょう。

さらに工房跡地の南、大井出橋の近くには平安時代後期の住居跡があります。さまざまな日常生活用具にまじって、中国製の白い磁器の椀が出土しました。当時は高価な希少品で、庶民には無縁のブランド品でした。このことから、この住居は粟生村でも限られた住民、つまり有力な上層住人の居宅であったと考えられます。また、敷地の一角には、地名のもとになった大日如来堂の旧跡もあります。

従って、当時の住人は、一族の氏寺を建立して相伝した藤原氏に及ばないまでも、平安時代の後期ごろの粟生村では指折りの有力者であったと推測できます。

中世の粟生村は、このような有力住民を頂点に、その下で農業を行う人々、一方では製炭に励む人たちが一体となり、ヒラミッド形の間模様を構成しながら存在していました。

地名でしよう。

こうした人々、つまり炭を生産していた集団の生活と生産の

基盤であったのが、同じ絵図に見える「釜屋」地区でしよう。

この釜屋地区の近くで勝尾寺川西岸に沿って所在している大日遺跡には、鎌倉時代中・後期の工房跡(鍛冶場)があります。

炭の生産に必要な金工具類がこ

籠」というように、炭が大半でし

た。おそらく、地区の北部に広がる粟生山が生産の舞台であっ

たよって、元禄二年(一六八九)の古絵図には、「タンバカマ(丹

波釜)」の地名が見られます。古

平安時代末から鎌倉時代になると、豊川地区でも林業による経済が発達してきました。売木や市木が盛んであった釜野地区

に対して、豊川地区は炭の生産が中心でした。例えば、鎌倉中